

はじめてのドライブの帰り、幹線道路の混雑を避けようと近道を探すうち、私が昔よく知っていた町を通り抜けることになった。

「あ、止めてください、あそこで。あの中学校のまえで」

唐突に頼んだことなのに、運転している彼は、なぜかと訊ねなかった。

そういえば、私が前夫と別れた理由も、まだ訊いてこない。彼を紹介してくれた伯母も、そのことについては何も説明していないと言っていたのだが。咲子さんが自分で話したほうがいいと思うの、そりゃ向こうはたぶん知りたいでしょね、やっぱり初婚だから。

交通量の少ない道路の際に車を寄せ、ドアを開けると秋風が首筋をひやりとなでる。私たちは道を横切り、水色が褪せた高いフェンスの前に立った。左手には細長い四階建て校舎が、正面から夕日を受けている。広いグラウンドでは、土曜日のこんな時間、まだ大勢の生徒たちがクラブ活動をしていた。奥まった場所には野球部が陣取り、真ん中はサッカー部、そして、一番手前にはテニス部のコートと陸上部の白線。あの頃と、少しも変わっていない。生徒たちの体操服やユニフォームのデザインは、すっかり新しくなっているようだけれど。

「ほんと、元気ですよね、子供ってというのは」

振り向くと、少し笑みを含んだ、だが、もの問いたげな目とぶつかった。

「ここ、私の母校なんです。いま通りかかったら、急に懐かしくなつて」

「へえ。咲子さんのご実家とは、ずいぶん離れてますね。ここは私立なんですか」

「いえ、公立です。私、中学を出るまでこの町で暮らしてたんですよ。ちょうど私の高校入学と同時に、両親があの家を買ったんです」

「そうですか」

「もう二十年以上たつんですね。あれから、全然この町には来てないんですよ」

彼は微笑んだ。それきり、私たちは、またぎこちなく前を向いて黙り込んだ。

幼い時分から、私はスポーツが苦手だった。幼稚園でも小学校でも、運動会のかけっこは、いつもビリか、せいぜいビリから二番目。それは私を悩ませる密かなコンプレックスになっていた。負けず嫌いな子供だった私は、人間には何事も向き不向きがある、まだそんなことがわからなかった。だからだろう、中学に上がったとき、苦手克服のつもりで自らテニス部に飛び込んだ。なぜ陸上でも体操でもなくテニスなのか。他愛もないこと、あの短いスコートを颯爽とひるがえしながらボールを追ってみただけだ。それに、そのころ仲良しだった近所の真奈美も、テニス部に憧れていた。彼女と一緒に入るなら、クラブ活動も楽しいだろうと思ったのだ。

今はどうだか知らない、だが、あの頃の運動部ときたら上下関係が厳しく、ずいぶん息苦しいところだった。地区大会では常にベスト4入りしているだけあって、熱心な顧問の先生がつくる年間スケジュールは、今思えば異常にハード、四十日の夏休みも、ほとんどがクラブ活動のために費やされた。正直、何度やめようと思ったか知れない。けれども、やめられなかった。皆から「落ちこぼれの烙印を押されることが、何よりも怖かったのだ。実際には、いくら練習しても情けないほど上達のみられない私など、誰からも期待されず、もはやその小さなグループから落伍しているも同然だったのだ。

あれは、二年生の秋だったか。強豪として知られるN校との練習試合を間近に控え、私はひどく憂鬱な気持ちになっていた。

なぜ、みんなそんなに真剣なの？ もう少し肩の力を抜いてもいいじゃない。気楽にやってもいいじゃない。クラブ活動って、眉間に皺を寄せてやらなきゃいけないものなの？

もちろん、そんな気持ちを皆にさとられてはならない。やる気の

ない半端者と見られるに決まっている。それでなくても実力のない者の言い分など惨めな遠吠え、何の説得力も持たないではないか。

いつも、真奈美だけが、弱音を吐ける相手だった。一緒に登下校し、お互いの家にもしょっちゅう遊びに行っていた真奈美にだけは、湿気た日陰に押し込めている憂鬱を、取り出して見せることができたのだ。

「あー、試合の日が近づいてくる。もう嫌で嫌で仕方ないよ」

こんなことも言えた。

「どうせあたしなんか弱いし、みんなの足ひっぱるだけだもん。試合だって、二年生だから温情で出させてもらってるだけで、先生も実はもつと強い一年生の中から出させたいと思ってるんじゃない？

ああ、こんなの針のムシ口。早く三年生になってやめたい」

こんなことまで。

真奈美はいつものように薄く笑った。

「そんなの気にすることないよ。たとえ運動神経わるくても、どうせクラブなんだから、たいしたことないじゃん。咲子は成績いいんだから、関係ないよ。ちよつとぐらい運動ができたって、勉強ができなかつたら、どうしようもないもん。勉強できるほうが、よっぽどいいよ」

確かに私は、勉強で困ったということは、あまりなかった。

知らないことを教えてもらうのは楽しかったし、わからないことがわかった時は、素直に嬉しかった。学校に通って勉強することが苦痛だとか疑問だとか、感じたことなど一度だつてなかった。テストも好きだった。あれは、まさにギャンブルの気分だ。赤い丸やバツがついた答案用紙を返してもらい、何点だったか確かめる瞬間のドキドキワクワク。皆がそろって全体行動をしなければならぬ遠足や課外授業より、クラブもなく、早く家に帰って自分のやりたいことができるテスト期間のほうが、私は好きなのだった。

真奈美のほうは、そうではなかったようだ。

テニスコートで彼女の打ち込む力強いサーブは、いつもびしりと決まって、ダブルスでは誰もが彼女と組みたかった。先輩にもおおむね好かれていたし、顧問の先生からも目をかけられていた。だが、

教室での真奈美はおとなしく、授業中にお喋りすることもなければ、教師の質問に進んで答えることもなかった。年に六回あるテストが終わったあと、私は彼女の答案用紙を見せてもらった覚えがない。彼女は誰ともそれを見せ合ったりはしなかった。何点だった？ 訊くと彼女はすぐさま用紙をくしゃくしゃと丸めてしまふ。早口で言った、咲子に見せるほど良くないよ。

「うそ。平均点よりは上でしょ？」

「えー。いいじゃん、そんなの。もう終わったんだからさ」

丸めた紙を、彼女は無造作に鞆のなかへ放り込んでしまふ。それ以上は訊けなかった。

私には想像力がなかった、恐ろしく幼稚だった。人の気持ちもわからなかったし、成績がいいとか、優秀な進学校に入るとか、そんなことがさほどの価値を持つようには実感できなかった。親の言うなりにいい点数をとっておけば、親も教師もほめてくれる、自分もその面では自尊心が保てる、そんな調子だった。それよりも私にとっては、目の前に迫った練習試合の場で感じるだろう屈辱と自己嫌悪を、どう我慢しようかと思う憂鬱さのほうが、はるかにリアルだったのだ。

唇を曲げて泣きそうな顔をしている私を、真奈美がまた笑って慰めた。

「気にすることないって、試合の勝ち負けなんか。たった一日だけのことじゃん。あたしなんか、毎日、教室で座ってるのがどれだけ嫌かしないよ」

私は何の考えもなしに生返事をした。

「そうかなあ」

真奈美が今度はいくらか真面目な声音で言った、

「そうだよ」

中学を卒業すると、私たちは、それぞれの学力に応じて、別の高校に進学した。同時に私は隣町に引越したので、真奈美とは、もうお互いの家を行き来することもなくなった。ときどき電話で喋っても、話の呼吸が微妙にずれているように思えた。急速に疎遠になっ

ていく感じが寂しくて、私は高校に入って初めてのゴールデンウィークに、電車に乗って彼女に会いに行った。

久しぶりに顔を合わせた真奈美は、なんだか雰囲気が変わって見えた。後ろに深くスリットの入った黒いタイトスカートを着いて、髪の毛先を軽くウェーブさせていた。私の通う高校ではパーマなど校則違反だけれど、真奈美のところでは許されているのだろうか。

私たちは、真奈美の家を出て近くの公園をぶらつきながら、若い娘に共通の関心事、恋愛について話した。彼女は、同じクラスの友達に紹介してもらったK工業高校の学生と付き合おうかと思ってる、と告白した。まだ片思いの対象さえ見つけられないでいた私は、半分は羨み、半分は茶化して、その男の子のどこがいいのかと訊ねた。

「べつに、どこがどうって、たいしたオトコでもないよ」

そっけない笑いとともに、彼女は答えた。

「あれ、ずいぶんクールじゃない」

「クールじゃないって。ほんとのことだよ。顔だってそんなに良くないし、お金もあんまり持ってなさそうだし、あんな高校行ってんじゃ、頭の程度だって知れてるし」

「性格がいいの？ 優しいとか」

真奈美は一瞬、私を見つめ、可笑しそうに赤い唇をゆがめた。

「べつに。普通じゃないかな。だいたいさ、オトコなんて誰でも性格みんな一緒じゃん。あいつだって、そうだよ」

私には、わからなかった。その男の子が、それほど魅力的でないなら、なにも付き合うことなんかないじゃないか。恋愛って、『この人じゃないと』という確信みたいなものがあるって当然なんじゃないか。そういうものがなくて、なんとなく付き合うのは、どうにも不純に思えた。私はいくらか憤慨して言った、

「じゃあ、そんなのやめといたら？ それって、ほんとの恋愛じゃないんじゃない？ もっとさ、自分がほんとに好きになれる男の子が現れるのを待ったら？ 好きでもないのに、いい加減な気持ちで付き合つと、あとで後悔するんじゃない？」

彼女は鋭く私を一瞥した。片手でクシヤツと髪を梳き、だるそう

な声で言った。

「咲子はさあ、そうすればいいじゃん。そういう男の子を探して、ほんとの恋愛をやりなよ。あたしはあたしだからさあ、これでいいんだ」

しばらく、沈黙を埋める言葉を見つけられなかった。尖った空気になっていたまねなくなつて地面に目を落としたまま、私はモゴモゴとつぶやいた。

「そうかな、それでいいのかな」

「いいの、だつて、あたしはアンタとは違う人間なんだもん」

思いがけず明るい声に振り向くと、真奈美の表情はさっぱりして、さつき見せた不可解さのかけらもなかった。けつきよく、彼女は私よりずっと大人だったのだ。駅まで送ってくよ、と言いながら、もう私とは会わないと決めていたに違いない。私のほうは、自分の部屋まで帰ってから、はじめて、彼女が私のことをアンタと呼んだのに気づいた。

あの日以来、二度と真奈美に会うことはなかった。どちらからともなく連絡を断ち、お義理の年賀状さえ出さなくなつてしまった。そして私が十九、大学に入った年の初冬、人づてに、彼女がもうすぐ結婚するらしいと聞かされた。もうおなかには子供がいるという。私は少し眉をあげ、へえ、あの子が、と驚いた。が、彼女がどこに住むことになるのか、その新居の住所も電話番号も、訊きたいとは思わなかった。

それが、彼女について私が知った最後のことだ。それからの彼女の消息は、まったく知らないのだから。

彼女は今頃、どんな女、どんな母親になっているのだろうか。

私には子供がない。二十四の春、同じ大学の先輩であった遅い初恋の相手と、そのまま幸せにゴールインしたが、子供はできなかった。

不妊治療は、三十の誕生日を機に私自身が言い出した。覚悟はしていたはずなのに、いったん始めてしまうと目的達成までは手探りで延々と続けられるその底のなさ、それが強いる肉体と精神の負担

に、やがて耐えきれなくなった。離婚したのは、周囲の期待に応えられなかったからではない。不妊外来に通い始めて三年が過ぎた頃から、夫とは心を通わずコミュニケーションとしてのセックスがなくなっていた。いまだ不確実な医学の進歩に一途な望みをつなぎ、だが毎回、月経という小さな流産で失望に終わる、そんなプロセスを繰り返した結果、いつしか一对の男女として向き合う気力が少しずつ失われてしまったのだ、お互いに。それでも治療をやめ、一緒に暮らしていればよかったのかもしれない。子供がなければ夫婦としてどこかが不完全だなどは考えるまい、そんなふうに気持ちを切り替えて。だが、もう無理だった。思いと思いがすれ違い、遠ざかってしまったその距離は、いまさら埋めるすべもないもののように感じられた……

「寒くはないですか」

見合い相手の優しい声に、私は微笑みながら軽く首を振った。

この人は、もうじき四十に手の届くバツイチの私に、何を求めたいのだろう。

彼にしても、四十二の今になるまで、一度も結婚を考えたことはなかったのだろうか。美大を出て、たまに小さな個展を開きながら、普段は文化教室で水彩画を教えているということだが、こういう人は、とかく世間の常識にはとらわれないと聞く。だから、私には彼の本意がわからないのか。

私はそつと隣の横顔を盗み見た。赤い陽の陰になった頬は、歳相応に疲れているようでもあり、いないようでもある。人の生にはそれぞれに困難が用意されている。多かれ少なかれ彼にだって、いろんなことがあつたはずだ。私たちはなぜ、すでに独立して存在する二本の糸をよりあわせ、これ以上、ものごとを複雑にしようとするのだろうか。離婚後、何度か持ち込まれた見合い話は断ってきた。一度だけ職場で短い恋をしたが、再婚など考えなかった。それなのに、今回は違った。彼の釣書にそれだけ魅力があつたのか。いや、そうではない。

地味な役所のルーティーンワークをこなすだけの日々嫌気がさしたのか。冷え込んできたアパートでの一人暮らしが侘びしくなっ

たのか。実家に帰ったとき、両親の老いを目の当たりにして不安になったのか。

そのどれでもない、だが、その全部が私をうなずかせたのだろう、あのとき。これが年齢からくる打算なのか。それとも、これが人というものの弱さなのか……

アツとひとときわ甲高い叫び声が聞こえ、私はまたテニスコートに目を戻した。さつきまで、すぐそこでボレーの練習をしていた二人の少女が、口をぽかんと開けて宙を見上げている。視線の先をたどると、打ち損ねたボールが高いフェンスを越えて、こちら側に落ちてくるのが見えた。

とつさに私は、アスファルトのうえを勢いよくバウンドしていくボールを追って走った。しばらくして、ようやくそれを手につかむと、息をきらせて戻ってきた。見ていた少女たちが声をそろえて叫ぶ、すみませーん。

いくわよ、と私はボールを投げ上げた。力いっぱい投げたつもりなのに、ボールはフェンスの端すれすれに当たって跳ね返り、またこちらに落ちてきてしまった。再び私はそれを追う。戻ってくると、少女たちが、まだこちらを見ている。もう一度、今度はもっと慎重に投げよう。と、そのとき、

「僕がやりましょうか」

見れば、彼が隣から手を出していた。

私は躊躇した。テニスボールを握りしめたまま、彼の穏やかな笑顔を見上げた。わざわざ彼の手を借りる必要はない。もう一度投げれば、ボールは難なくあのフェンスを越えるだろう。だが、男にしては華奢な彼の手のひらに、私はボールをのせた。

「じゃ、お願いします」

彼はボールをつかむと、軽々と投げ上げた。私はそれが細長く弧を描いて高いフェンスの向こう側に落ちるのを見ていた。待っていた女の子たちがボールを拾い上げ、笑顔でひとつ礼をする。顔を見合わせて冗談を言いながら、また練習に戻っていく。その後ろ姿に、私はあの頃の真奈美と自分を重ねてみようとした。が、うまくはいかなかった。私たちは、すでに遠くまで来すぎている。そして、さ

らに続いていくだろう遠さの予感が、あの未分化な肢体に二つの面影がおさまってしまったのを、ぼんやりとはぼんでいた。

^了^
v